

寒山拾得の図像

松尾芳樹

道釈画の画題の中には、よく目にしながらもその由来を尋ねると存外に明確でないものがある。寒山拾得図もそのひとつで、書卷や箒を持つ容貌怪異な寒山と拾得二人の図像がどのような経緯を以て生まれたのか実はそれほど明らかではない。近世の粉本を手がかりにこの図像へのアプローチを試みたい。

一 寒山拾得伝の成立

寒山拾得の二人、実在の人物であったかどうか確かめるすべがない。あるいは初唐の人といいあるいは唐末の人という。津田左右吉氏や入矢義高氏の研究など、文献に則した寒山拾得像を模索する成果があるものの、依然として彼らの真実とは霧の中である。

両者が広く喧伝されるようになった理由は『寒山詩』の存在にある。この書物も実は成立時期が定かでなく、『禪月集』巻十一に既に寒山の詩に触れたものがあるところから、九世紀の末頃には原型が出来ていたことが分るに過ぎない。つまり、寒山の現実はこの詩の作者ということばかりである。

『祖堂集』巻十六や『宋高僧伝』巻十一には唐末の禪僧瀉山が天台山で寒山と出会ったことが記され、『古尊宿語録』巻十四は同じく唐末の禪僧趙州が寒山に出会ったとしている。ところが『太平広記』巻五十五に収録される南蜀杜光庭の『仙伝拾遺』には寒山を八世紀後半に天台山に隠棲していた道士として記している。つまり、寒山は道士の如く扱われる一方で、禪僧と交渉する伝も生まれていたことになる。唐末五代の頃には寒山を実体化した寒山伝説が生まれていたと考えられるが、重要な点は伝説の中にその輪郭を形成する過程で、寒山が次第に禪家に引き寄せられていることであろう。

もちろん寒山自身が禪と関わりがあったという証はなく、こうした動向はその詩を禪精神の表れと見なす解釈が独自に行われた為と思われる。寒山の詩は、仏教的色彩はあるものの、むしろ隠棲の楽しみを語り、通俗な世間への批判に溢れた自由な精神の表れと見るべきものである。ましてや流布する寒山伝の

ような風狂の奇人が詠むものではなかった。仏教に接点を持ち、難解であるがゆえに、禪詩と見なしやすかったのである。寒山は本来居士でも僧でもなかったとされる。その詩によって伝説の誕生が促され、禪機に深く関わるべく潤色されることになったのである。

現在の寒山拾得伝の源流は『寒山詩』に付された序をもって生まれたと考えられている。この序は拙文と評されるが、この序を著し詩集を編んだとされる閻丘胤という人物、「朝議大夫使持節台州諸軍主刺史上柱國賜緋魚袋」という高位の肩書を持ちながら正史に見えず、架空の人物であるらしい。序には寒山を主として拾得と国清寺にいたとされる僧豊干の伝記が述べられているが、後二者の伝については触れるところ少なく、『寒山詩』宋刊本の中に「豊干禪師録」「拾得録」を付してこれを補完するものがある。この二つの伝記には詩が続けられ、その為『寒山詩』は『三隠詩』と呼ばれることもあった。但し、「豊干詩」「拾得詩」の内容は寒山詩に倣って作られたものとされるから、何者かが後に補ったのだろう。

『宋高僧伝』巻十九・『景德伝燈録』巻二十七・『五燈会元』巻二・『仏祖統記』巻三十九など中世の日本に舶載され禪林に普及した史伝書中の寒山像、すなわち「容貌枯悴、布襦零落」とした怪異な人物像は、概ね閻丘胤の序に依るところが大きい。伝説の成立過程としては、寒山の存在に依って拾得が生まれ豊干が生まれたと考えられ、三隠として禪精神の中に解釈されるに至ったと考えられる。拾得・豊干二人の伝記が何時頃成立を見たか定かではないが、閻丘の序の成立に遅れ、『宋高僧伝』『景德伝燈録』のような宋代初頭の史伝書に先行するものであったと考えるのが妥当かと思う。

彼らの伝記は豊干・寒山・拾得三人の伝記に分割されるのが普通で、『寒山詩』を始め先に挙げた史伝書、『太平広記』巻五十五・『仏祖歴代通載』巻十・『神僧伝』巻六などに伝えられる寒山拾得の伝記は、事物の相違、挿話の有無や詳細において異同があり一定しない。

『寒山詩』の日本への伝来は、平安時代後期の記録(成尋『參天台五台山記』)が早いものとされるが、正中二年(一二三五)に宋刊本が覆刻されてから、禪林を中心に読まれる機会が拡大した。しかし、中国はもとより日本でも近世になるまで寒山詩の注釈書は作られず、その難解さゆえか詩文としての影響は当時ほとんど見られなかったようである。

二 土佐派の寒山拾得図粉本

土佐派絵画資料の中には実に六十三点上る寒山拾得図が含まれている。寒山拾得といえ、典型的な道釈画の画題であり、狩野派など漢画系絵師や画僧が描くことが普通である。大和絵の画系にある彼らが、どのような理由でこうした道釈画の画題に執着したのか理解に苦しむところであろう。

土佐派は中世においては仏画制作にも関わったが、近世では仏画道釈画の類をほとんど描かなかったと見え、光起が著した土佐派の秘書『本朝画法大伝』には「佛像は我家に定法なし爰に省く」とある。本資料の中にも独立して神仏を描いたものは極めて少ない。

観音像や達磨像など様々な道釈画が流布する中で土佐家が寒山拾得図のみを収集したのは、制作の依頼があったためと考えるのが合理的だろう。幸い本資料の中には制作下図と考えられる胡粉の修正が加えられたもの(目録番号88)があり、その状況の一端を窺わせてくれる。この資料には砂子泥引による制作の依頼を受けたことが記されており、多くの寒山拾得図のような墨画の世界とは一転して装飾的畫面とされたことが分る。

寒山拾得も先賢の一人と考えれば、勸戒画の一つと見なすことができるから、障屏画を描いていた土佐家としてはこうした依頼を受けて格別不思議なことではない。家法になく粉本の蓄積のない分野であったため、かえって精力的な収集となったのであろう。

ここに収録された寒山拾得図は多くが漢画系絵師や中世画僧らによる古画の模写・縮図である。中国画を写したと思われるものも、現存が確認できるものを含み、⁽⁴⁾ 舶載画の資料となろう。墨書に示された画の作者名は重複も含めて十六名にのぼる。これらはもちろん全てが真蹟であるとは限らないが、列挙すれば日本の能阿弥、相阿弥、周文、明兆、雪舟、祥啓、黙庵、可翁、狩野元信、狩野真説、久隅守景、山田道庵、曾我蛇足、松花堂昭乗、中国の羅窓、因陀羅となり、凡そ室町桃山期の代表的水墨画家の名がならぶ。

墨書によれば粉本作者として光成と光高すなわち後の光祐の名が挙げられる。書写の年紀を見ると寛文から元禄の間に集中しており、資料の状態からみて年紀を欠く資料も大半は同時期のものと見てよいだろう。土佐家が収集を継続した期間は年紀の上で分るだけでも二十数年間に及ぶ。だとすれば制作依頼の可

能性はこの間継続していたのかも知れない。また鑑定の依頼がしばしばあったことも墨書から知られ、当時思いのほかこの寒山拾得図が流布していた状況が分る。そして当時の寒山拾得図鑑賞の盛況ぶりを裏付けるのが「探幽縮図」である。狩野探幽らの縮図集として知られるこの資料は膨大なものだが、この中にも多数の寒山拾得図が収録されている。内容が公刊されている京都国立博物館本によって「探幽縮図」中の寒山拾得図を確認すれば、探幽らが鑑定依頼などによって縮写した年紀も寛文から元禄にかけてのものであり、不思議に土佐家の資料と一致している。

この時期土佐家のみならず狩野家にも寒山拾得図を目にする機会が多かったことは『首書寒山詩』(寛文十一年一六七二刊)、『寒山詩管解』(連山交易著、寛文十二年一六七三刊)といった『寒山詩』の注釈書がこの頃出版されたことと無縁ではなからう。それまで『寒山詩』の版本は五山版などの覆刻などに依らざるを得ない状況だったから、難解な寒山詩の普及はこうした注釈書の存在なくして考えられなかったからである。注釈書の登場によって、以前に比べればずっと寒拾両者に対する関心が高まり、この異形の人物画にも興味が寄せられやすかったものと思われる。それでも大方にとって禪的境地の表れとして解かれた寒山の詩は難解なものであったにちがいない。寒山拾得は相変わらずその本質への理解を得ないまま、舶載画への憧れを背景に、漠然とした絵画上のイメージの中で愛好されたと思われる。

三 寒山拾得の図像

図像の検討に入る前に寒山拾得伝の主要な部分を示す。各種の挿話を包括しながら短く纏められた『景德伝燈録』⁽⁵⁾によったが、現存する図像から見て描かれた例を見ない挿話等は割愛した。

「天台の寒山子は本より氏族なし。始豊縣の西七十里に寒明の二巖あり。その寒巖中に居止するを以て名を得るなり。容貌は枯悴、布襦は零落。樺皮を以て冠となす。大木屐を曳きて時に國清寺に來り、拾得に就きて衆僧の殘食菜滓を取りこれを食す。或いは廊下を徐行し、或いは時に叫噪して空を望み慢罵する。寺僧杖を以て逼逐すれば、翻身して掌を拊ち大笑して去る。言出れば狂の如しと雖も意趣あり。(略)閭丘公山に入りて之を訪う。寒拾の二人の鑪を囲んで語笑するを見る。閭丘覺えずして拝を致す。二人声を連ねて咄叱す。寺僧驚

愕して曰く。大官何ぞ風狂の漢を拝するや。寒山復た閭丘の手を執り、笑いて曰く、豊干は饒舌なりと。久しくして之を放つ。此より寒拾相携えて松門を出で、更に復寺に入らず。(略)閭丘哀慕して僧道翹をしてその遺物を尋ねしむ。林間に葉上に書く所の辞頌を得、題は村野人家屋壁に及ぶ。共に三百餘首人間に傳布す。」

「天台の拾得は名氏を言わず。因みに豊干禪師山中に経行す。赤城の道側に至るに兒の啼く声を聞く。遂にこれを尋ぬるに一子の数歳ばかりなるを見る。初め牧牛子と謂えり。これに問うに及んで云う。孤にして此に棄てらるゝと。豊干乃ち名づけて拾得となす。携えて國清寺に至る。(略)厨内の器を滌わしむ。常日齋畢るに食滓を澄濾して筒を以てこれを盛る。寒山来りて即ちこれを負いて去る。一日地を掃くに寺主問う。汝の名は拾得。豊干の汝を拾い得て歸ればなり。汝畢境して姓は箇のなんぞ、何れの處に在りてか住むと。拾得掃帚を放下して、叉手して立つ。寺主測ること罔し。寒山胸を捶ちて云う、蒼天蒼天と。拾得却つて問う。汝なにをか作すと。曰く、豈道を見ずや。東家に人死すれば、西家哀を助くと。二人舞をなし、哭笑して出ず。」

そこでこの伝記に基づき、寒山拾得図の図像分類を、本資料と京都国立博物館本「探幽縮図」から得られた模本をもとに試みた。詳細は別表に従うが、便宜的な判断を加えつつ全体を持物と姿態から幾つかのパターンに分けている。各項をさらに細かく分類したのは煩瑣であるが、閭丘の序に見える樺皮の冠や木屐を履いたという寒山像の原型がどこまで図像に反映しているかを示す意図で示した。

表を見ると流布するところやはり、寒山は巻物を持ち拾得は箒を持つという図像が最も多い。今日の寒山拾得像の典型が示されているわけだが、先の史伝類には寒山が書卷を持つとしたものは見当たらず、拾得が箒を持つことを記した伝も必ずしも一般的なものではない。両者の図像成立には史伝からの敷衍が必要だった。

そして寒山の容貌を決定する大きな要素となったのは閭丘胤の序の「寒山は文殊なり、迹を國清に遯る。拾得は普賢なり。」とした記述である。文殊菩薩は普賢菩薩と共に釈迦如来の脇仕として認識され、また禪林の僧堂に祭られて禪家には馴染みの深い尊像であった。一般には難解さゆえ普及しにくかった寒山詩が禪家を中心に愛好されていたことが、この文殊の図像の借用を生んだも

のといえる。寒山を文殊菩薩の垂迹と見、林間や村野に三百首以上もの詩を書きつけたという伝説とその証としての『寒山詩』の存在があればこそ寒山は文殊の持物である経巻を持つことができた。

寒山は科挙に挫折した知識人であったとする説に従えば、頭に木の冠を戴くことは批判精神の表れとして寒山のシンボルに相応しいのだが、多くの場合蓬髪に描かれ、しばしば髻を結っている。この蓬髪の姿は道釈画中の文殊の図像にしばしば見出されるものであり、また髻の場合は多く二髻に描かれる。寒山が文殊の知恵を持ちその知恵が童子の如く清浄であるとの解釈なのであろう。年齢不詳の寒山が陋醜に描かれる一方で、童子様に描かれる理由は彼が文殊の垂迹とされるところにある。

この寒山像と文殊像の結びつきが、どのように始まったものか定かではないが、閭丘の序に記された数少ない寒山の特徴である樺皮の冠や木屐を履いた図が少ないことを見ると、早くから図像上の影響を与えていたものらしい。

従って閭丘の序には屐を履くとされた寒山も、その智のアナロジーとして無垢の自然人たるべく裸足とされることが多く、屐の代りに履を履かされるに到り、史伝の力は儚いものとなった。もともと『景德伝燈録』には屐を履と誤って記したのもあったようだから履を履いたものには拠があったことになるが、誤伝には変りない。

では拾得の箒についてはどうであろう。先の史伝書の中で「拾得掃地」が記されているのは前掲の『景德伝燈録』と『五燈会元』の二書のみである。そして成立もわずかに先行し、分量で二書に勝る「拾得録」『宋高僧伝』には見えないのだから、これは追補もしくは別系統の説話が混入した可能性がある。寒山拾得図が多数制作された南宋期にして伝説はなお流動的であった。

寒山拾得と併称しているものの、寒山伝説の成立過程から見ても、人々の関心が寒山に篤く、それを補う形で拾得が生まれたことは間違いない。史伝書には拾得の依拠する図像が記されておらず、寒山に倣う他なかったから、寒山と拾得は容貌の上でも相似ざるを得なかった。拾得に冠を頂き屐を履く図があるのもそのためである。だから、持物でもない区別の難しい不都合が生じる。ために文殊の垂迹として寒山が巻子を持つのに対して、少し珍しい説話ではあったが拾得が箒を持つという挿話は都合がよかったのであろう。

四 図像の展開

寒山拾得像の原型は、もとより閭丘の序から生まれたものである。そして、月を描くなど寒山詩の内容を反映した図も生まれてはいるが、寒山拾得伝はきわめて禅的に解釈された難解な「寒山詩」そのものではなく、序を展開させた史伝書によって知られることが普通であった。にもかかわらず、寒山拾得の図は、史伝にない図像で制作されている。禅家に好まれた両者は、あたかも禅機の狂言回として認識されたかに見える。だから両者を祖師と呼ぶには抵抗がある。禅機画であることが寒山拾得図の自由な展開を約束したと云ってよい。彼らは史伝に生まれたが、まもなく禅家の機知の広野に放たれたのである。寒山拾得の絵画化にあつて、史伝が必ずしも典拠とならなかった第一の理由はここにあつた。

このように寒山と拾得が類似の図像を持ちながら、史伝を離れて描かれた結果、両者の混同が生じた例も見られ、こうした混同は図像に止まらずついには伝記にも及んだ。室町期の辞典である『璫囊鈔』卷三には寒山が衆僧の漿を飲み命をつないだ札として庭を掃いたとして大きな誤解を見せている。こうした誤解や混乱がまた、寺にいた拾得に数珠を持たせ寒山と区別する作意を見せたり、大胆にも寒山の図像に箒のみ書き加えて拾得としている怠惰な作図を生むなど寒山拾得図のバリエーションを増長させることになったようである。

「探幽縮図」を見ると、寒山拾得の図は三幅対の形で制作されることも少なくない。両者を文殊普賢と考えるとところから、釈迦と寒山拾得を組合わせるもの、観音と寒山拾得を組合わせるものが多いようだが、三隠の一人である豊干を中尊とするものは少なく、豊干の本性である阿弥陀を中尊とするものはない。また寒山拾得を居士のごとく扱い維摩と組合わせるものさえあつたようだが、これら対幅の図もある意味で、伝記と関わりのない図像と云ってよいだろう。多くは禅林で考案された組合わせと考えられる。加えて、豊干と虎と寒山拾得の居眠る姿を描いた四睡図も先の伝記には見えない図様であり、禅家の創作した姿といえる。中国画にも見え、四禅定など禅家に四の基数を以て禅精神を論ずることがその背景にあるものと思われるが、その発生はよくわからない。

『璫囊鈔』卷三には「四睡トハ何ソ」と題して四睡図の解説をしているのだが、それは単に豊干寒山拾得の伝記を示すにすぎないのである。

寒山拾得図を語る時少し触れておかなければならないのが和合神との関係である。これは本来中国の民俗神で、日本には江戸時代後期に流行した一種の財福神^①だ。その図像は寒山拾得に似た和聖と合聖二神が蓬髪緑衣に描かれている。『燕居雜話』卷二に『瓊浦筆語』が引かれて「世に伝うる所の和合の図は何の神か。或人云う即ち寒山拾得なり。」と説く。これは清代の類書『通俗編』卷十九に「国朝雍正十一年。唐天台僧寒山大士を封じて和聖と為す。拾得大士は合聖と為す。亦和合二聖と称す。」とあることが拠とされている。

雍正十一年は日本の享保十八年（一七三三）にあたる。この寒山拾得がなぜ和合神に封じられることになったのか、このあたりの理由は不明な点が多い。伝記には拾得を賢士となすという条があるばかりで和合の語は見えず、伝記からその根拠を見出すことは難しい。しかし、もとより図像上瓜二つとならざるを得なかった寒山拾得だから、そこに禅家が一如の思想を見ることは可能であつた。本資料（目録番号86）や京博本「探幽縮図」の中の資料^②には寒山拾得二人の顔を重複させて一人の顔の如く描くものがあり、寒山拾得に和合の精神を反映させようという機知の存在は充分窺うことができる。強い印象を持つ図像がその解釈を拡張して利用されることは決して珍しい事ではない。

貞享五年（一六八八）刊『絵本宝鑑』卷三に収録された寒山拾得図は、伝記に拾得を賢士となすとある部分を拾い出し翻案したもので、図も草庵に住む寒山拾得の下に勅使が訪れる図が新たに創作されている。伝記には瑣末な記事でしかない拾得に称号を与える説話は、和聖合聖の例のみならず意外に民衆の指示を受けやすかつたようである。

寒山拾得に関してはその伝記の確立時より不明な点が多いが、中世から現代に至るまで、多く人々の創作意欲を刺激してきた。そこに生まれた作品は、禅精神の狂言回たる役割を果たしつつ史伝の束縛から開放された寒山拾得を描いて、禅家の機知が大きく働いた興味深い絵画分野を我々に遺している。本稿では現存する作品には触れずに模本による図像の検討を行ったが、必ずしも資料豊富とはいえないこの分野の絵画研究にこれら模本の果たす意味は少なくない。

註

（1） 津田左右吉「寒山詩と寒山拾得の説話」（『シナ仏教の研究』／岩波書店）。入矢義高

- 『寒山』(中国詩人選集五／岩波書店)。重要な寒山詩研究には他に入谷仙介・松村昂『寒山詩』(禪の語録一三／筑摩書房)がある。
- (2) 入谷・松村前掲書「解説」及び津田前掲書。
- (3) 台湾商務印書館刊『四部叢刊』後印本に影印された毛晋旧蔵本『寒山子詩』が知られている。
- (4) 中国絵画紛本の原本が確認できるものは以下のとおり。目録番号62Ⅱ『中国絵画総合図録』巻一(東京大学出版会)／図A三〇一〇二三。目録番号80Ⅱ『中国絵画総合図録』巻四／図JP二二一〇五五。図録番号60Ⅱ『水墨美術大系』巻四(講談社)／図一二。目録番号57Ⅱ『中国絵画総合図録』巻四／図JP二二一七六。
- (5) 大正新修大蔵経巻五十一史伝部(三)二〇七六『景德伝燈録』巻二十七に従った。読み下しには註により一部(註9参照)字句を改めた。
- (6) 割愛した主な挿話は次のとおり。「豊干饒舌」の話の前半部は閭丘胤が豊干に病を治してもらい、その折寒山拾得が文殊普賢と教えられているというもので、豊干伝に記される。「拾得呵神」の話は国清寺の食物が鳥に盗まれていたため、拾得が伽藍守護の神像を杖で打ち叱ったところ、僧達の夢に神が現れたため僧達が驚いたというもの。そして『五燈会元』に収録される「寒山茄串」の話は寒山が茄子の串を以て僧の背を打ち禅を試したというもの。
- (7) 入谷・松村前掲書「解説」。
- (8) 縄衣文殊像に典型をみる蓬髪文殊菩薩像は、中国宋代頃から制作されたようだが、その成立状況は明らかでない。しかし、文殊寒山両者の図像が成立過程で交渉を持つことは遺例から見ても明らかであり、本来異なる性格を持つ二つの図像は禅精神を背景として共通の基盤の下で展開したと考えられる。この場合垂迹関係にこだわらずとも、図像の様式化が明確な文殊像が範とされる状況を考えるのが自然であろう。
- (9) 前掲『景德伝燈録』の本文には履が記され註に履が校される。
- (10) 『寒山詩』には「吾心似秋月」の五絶の如く月を詠み込んだものがあり、図に『探幽縮図』下(京都国立博物館編／同朋舎出版)二五五頁の三二一五八図のように賛から月を描いたと想像できるものや『中国絵画総合図録』巻一／図A二二一八五のように無賛の拾得図ながら上空に大きく月を描くものがある。
- (11) 服部幸雄「和合神の図像」(『月刊百科』三一八・三一九号／平凡社)。幸田露伴「和合人と合神」(『露伴全集』巻一九／岩波書店)。
- (12) 『探幽縮図』下二五四頁の三二一五五図。

(京都市立芸術大学芸術資料館学芸員)

				土佐派絵画資料(* 1)			探幽縮図(京博本)(* 2)		
	図像の特徴(* 3)			裸足	履を履く	屐を履く	裸足	履を履く	屐を履く
寒山図	A	無為(拱手・望空)	結髻	52	53・54・56			39-19・45-52	
			蓬髪					32-58	
	B	空を指差す	結髻		47・59				32-12
			蓬髪			57・58			
	C	筆を持ち詩書	結髻	45(冠)	38	49			
			蓬髪	60			32-69		
拾得図	D	卷子を持つ	結髻	35・61・63・65	37・51	34	32-14・32-36	32-44・39-10 39-14	
			蓬髪	42・62・66・67	40		45-3	39-108・39-111 45-22	32-21
	E	無為	結髻						
			蓬髪	43					
	F	箒を持つ	結髻	76	36・68・69・72		32-37・32-44 39-19・39-111 45-3・45-52	29-25・32-54 39-10・39-108	
			蓬髪	39・74・75	41・50・70・71・73		32-13	32-69	
寒山拾得図	G	箒を足下に捨つ	結髻		46・77				
			蓬髪	78・79・80			32-46・45-22	39-14	
	H	墨を摺る	結髻		81	82(冠)			32-20
			蓬髪	44・48					
寒山拾得図	I	寒山拾得無為		94・95・96			26-15・39-107		
		寒山無為・拾得持箒		84・85・86			29-4・32-55・32-62・45-82		
	J	寒山持卷子・拾得持箒		87・88					
		寒山持卷子・拾得無為		89・90・91・92			27-2		
	K	寒山詩書・拾得墨摺		93					
四睡図	L	単幅					26-9・32-23・32-24・32-59		
		三幅対					32-22		

(* 1) 土佐派絵画資料目録(四)の目録番号。55は54の部分図なので省いた。

(* 2) 京都国立博物館編『探幽縮図』(同朋舎出版)の図版番号。前半は資料の番号(26＝道釈人物図巻、27＝道釈人物図巻、29＝神仏図巻道釈人物画、32＝道釈人物図巻、39＝和漢古画冊、44＝仏像祖師画冊、45＝仏像祖師仙人花鳥獸画冊)後半は目録所載の図番号。但し、対幅でありながら寒山と拾得の区別のつかないもの(39-8)と対幅の半身像(45-85)は図像を判別しがたいため省き、出山釈迦寒山拾得図(29-23)も特殊な図像であるため省いた。

(* 3) 図像の分類は姿態の特徴を基本としているが、『寒山詩』の序に示された図像に従い頭部と履物の特色によって細分した。中間的性質を持つものは主要な要素に従い振り分けた。各図像と本文中の寒山拾得略伝に対応する箇所があればA～Lの記号により本文に示した。